

特集 ダリットと部落をつなぐもの とりくみは続く

ダリットと部落の運動は古くから接点をもってきた。特に、2000年以降は「職業と世系に基づく差別の撤廃」と「反人種差別世界会議」(南アフリカ、ダーバン)という国連の取り組みを通じたダリットと部落の係がさらに強化された。今号では、インドとネパールで行なわれた両者をつなぐ最近の取り組みを紹介するとともに、インドにおけるダリット女性たちの集会を紹介する。ダリットと部落を中心にした差別撤廃の国際連帯をさらに発展させる可能性を探ってみたい。

ダリットのとりくみに学び、連帯の絆をむすぶ旅

10月7日から12日まで、IMADR-JCはダリットの闘いから学ぶ目的でスタディツアーを行なった。訪問を受け入れてくれたのはIMADRのパートナー団体である農村開発教育協会(SRED、インド、タミールナドゥ州)であった。ツアーには、IMADR-JCの2010年の重点取り組みの一つである「マイノリティコミュニティの青年が国際連帯について現場で学ぶことを支援する」に沿って、部落解放運動に関わる青年2人も参加した。彼らを含む5人からなるグループで実施したスタディツアーについて各参加者の報告を中心に紹介をする。(編集部)

さらに知りあい 理解しあうことを求めて

小森 恵(IMADR-JC)

今も続く隔離と排除

SREDは農村におけるダリットの問題に取り組んでいる。私たちが訪ねたダリット居住区はどこも周囲から切り離された場所に立地していて、水、電気、道路などの事情は悪い。ある地区では粘り強い行政交渉の結果、道路を勝ち取った。その地区から留保制度(是正措置)のもと村議会に議員を一人送っている。彼は現在議長を務めているが、他カーストの議員の嫌がらせや妨害で議長職を果たせず困っていた。

日本における特別措置事業の前後の違いを示す写真を見せた。山懐に包まれ他から切り離された部落地区の写真、そこにつながる橋が割り箸のようなものから鉄骨に変わった写真、環境改善前と後の都市部落の家並み。日本に行ったことのないSREDのメンバーたちは差別の結果として表れてくるものを映像で見ることで、部落差別を身近に理解してくれたようだ。

カースト制度はヒンドゥー教にまつわる身分制度である。人口約6200万人のタミールナドゥ州をカースト分布でみれば、一部ブラーミン(僧侶階層でカースト制度では最高位におかれている)と、他はほとんどがシュードラ(人の嫌がる仕事を押しつけられてきた最下層)と第5のカーストといわれるダリットである(州人口の20%を占めており、全30州のうち人口比では5番目に高い)。中間に位置するクシャトリヤ(武将などの階層)とヴァイシャ(商工業などの生産にかかわる階層)の人口比は低い。生活現場で起きているダリットへの差別はシュードラが関与するものが多いそうだ。

SREDとの話しの中で、「カーストをなくす結婚を奨励」という言葉が出てきて、思わず聞きなおした。カーストにこだわらずに外に出て行き、他の人びとと交わることによりカーストをなくしていく、というものだ。しかし現実には厳しい。ダリットと他のカーストとの結婚が殺人も含む悲劇を今も生み出して

スタディツアーの日程

10月7日 成田・関空発 バンコク経由で
チェンナイ空港に深夜到着
8日午前 チェンナイ市内 タミールナ
ドゥ・ダリット女性運動(TNDWM)の
事務所にてオリエンテーション
午後 チェンナイ市内のスラム訪問後、宿
泊地のカンチプーラムへ移動
9日午前 SREDのオフィスにてスタッフ
および運動体とミーティング
午後 ムトゥール村とランガヴァラム村を
訪問
夜 ファティマさんの村のお祭りに参加
10日午前 カンチプーラムのヒンドゥー
寺院および遺跡を見学
午後 ルマンガラム村を訪問
夕方 アンベドカル学習コース修了式に参
加
11日午前 故田中敦子さんの写真を飾る
セレモニーと部落青年に関する調査
報告
午後 チェンナイに移動
夜 深夜便にてバンコク経由で帰国

いる。州の開発政策のもとタミールナドゥ州には経済特区がいくつも作られ、多数の多国籍企業が操業をしている。そうした工場で若者たちが出会い、結婚に至ることもよくある。そこで初めてそれぞれの出身カーストが分かったりする。そうした意味からも人口の動態は多様になっており、カーストによる厚い壁への人びとの挑戦は意識するしないにかかわらず、今後ますます増えると思われる。

貧困問題の解決

インド政府が国連で公約したミレニウム開発目標における貧困撲滅指数を達成するため、タミールナドゥ州政府はいくつかの貧困対策をしている。その典型が各戸へのテレビと調理コンロの無料配布だ。しかし、ダリットの多くは電気やガスの普及が遅れている農村に住んでいる。テレビもコンロも役には立たない。「ばら撒きだ」と人びとは批判をする。失業者への雇用対策として公共事業も行なっている。道路建設や森林整備などの職を年間1人100日保障するということだが、ダリットの人たちには、なかなか雇用が回ってこない。回ってきても、その中で一番きつくて人の嫌がる仕事を押しつけられ、おまけに賃金をピンはねされる。農地を工場用地に転売する地主が増えているために、それまで就いてきた賃労働の農作業の口もぐんと減った。さらには、今年は雨が降らないために作物が育たない。私たちが訪問した村の人たちは、こうしたことを背景に生活苦に喘いでいた。

未来への希望

厳しい現実の中、うれしい取り組みもある。SREDでは高校生を中心にアンベドカル学習コースを3年前から実施している。若い人たちにアンベドカル博士の思想と実践を学んでもらい、次世代を託すことが目的だ。協力しているのはタミールナドゥ州のマドレイ・カマラジュ大学である。受講生は通信教育と月1回のスクーリングからなる1年間のコース

地域の拠点としてのディケアセンター

SREDはダリット子どもディケアセンターを7か所で運営している。立ち上がりから運営まで、資金面を中心にIMADRは協力してきた。それができたのは、連合「愛のカンパ」、大阪同和・人権企業連絡会、浄土宗国際協力プロジェクトなど、日本で支えてくれた諸団体があったからだ。農村地帯のダリットの居住区はインフラも十分整備されていない。そのような中、地区で共有できる建物は大きな財産であり、希望と未来に向かうシンボルである。どのディケアセンターも机・椅子、本棚



などはほとんどなく質素である。その建物が、幼児のディケアセンターのみならず、小学生たちが夕方補習クラスに通い、大人たちが会合や社交に利用できる場としてフル回転で使われている。公共サービスがほぼ届かない周縁に追いやられたコミュニティの人びとにとって、こうした拠点をもつことは大きな意味がある。未来につながるこうした場を絶やしてはいけない。

を受け、課題のペーパーを提出する。ダリットだけではなく、他カーストやモスレムの青年たちも受けている。毎年百数十人が受講しており、ほぼ全員が及第点をとって1年後には巣立っていく。修了が認定されれば大学進学や就職時に役立つということだ。SREDが負担をしているため授業料などは無料である。しかし、今年は財政的に厳しかったため、SREDの依頼を受け、IMADRは修了認定にかかる費用の一部を支援した。実際は、IMADR ジュネーブ・オフィスの故田中フォックス敦子さんのご家族からの寄付を活用させていただいた。

そのため、私たちの滞在中に2010年卒業の修了式が行なわれた。ツアー参加者を代表して部落の青年2人がステージに上がった。お祝いのスピーチをするとともに、修了生一人ひとりに渡された修了証書の授与を手伝った。証書を受けとる修了生100人の顔はどれも達成感に満ちていた。部落とダリットの若者が出会う輝く瞬間であった。

(こもりめぐみ)

女性の自立と手作りショップ

SREDには実にさまざまな人びとが入り込んでいる。女性のグループだけ見ても、マタマのグループ、セックスワーカーのグループ、イルラ(先住民族)のグループ、工場労働者のグループなどが拠点として活動をしている。ダリット女性のレイプ事件、警官に賄賂を強要されたセックスワーカー、ダウリ制度で婚家から暴力を受けたダリット女性のケース・・・ SREDに集まってくる女性たちは相談サービスだけではなく、意識化と教育、そして自立のためのスキルトレーニングなどのプログラ



ムもうけることができる。スキルトレーニングには、ミシン縫製(衣類や小物)、刺繍、紙コップ作りなどがある。トレーニングで得たスキルは女性たちが仕事を探す上で役に立つ。SREDで備えているミシンや紙コップの機械を使って腕をあげた研修生たちが作った製品は立派な売り物となる。そうした製品を売る手作りショップがSREDの一面に設けられた。

インド スタディーツアーに参加して

深田 広明(部落解放同盟群馬県連合会)

IMADR 国際連帯スタディーツアーに参加し、多くのことを学び、さまざまなことを感じたことにより、もっと学ばなくてはいけないと痛感いたしました。

インドへの研修に声をかけていただき、参加することを決めてから、インドについて資料としていただいたものを読んだり、実際に行ったことがある人から話を聞いたりしましたが、大変かなといった程度しか想像することができませんでした。

実際に行ってみて、人の多さに圧倒されました。チェンナイ空港を出るとたくさんの人がいて、ホテルに向かう途中も現地時間で12時を過ぎているというのにたくさんの人が歩いています。インド滞在中、人がいないところはまったくなく、驚きました。

根深い差別意識

今回、インド滞在中に多くの人たちから話を聞き、深く印象に残ったことは、結婚に関する話です。

ダリットの男性とダリットではない女性の結婚の際に、女性の親から男性に対して暴行がふるわれ、運動団体が間に入り解決できた話や、家財道具を壊したり、家畜を殺したり、最悪のケースでは相手の親が怒って結婚した2人を殺してしまったという事件が、最近の話として紹介されました。

インドの結婚の風習として、持参金制度というものがあり、女性が結婚する時にいろいろなもの(主に現金)を持っていくそうです。ダリットの中では家畜が多かったそうですが、持っていかないと虐待を受け、酷い場合は焼き殺されてしまったこともあるそうです。

部落の出身として、私は青年部の中で取り組みをおこない、学習をしています。部落の青年にとって一番身近な差別は、恋愛や結婚です。実際に自分自身でも結婚の問題を抱えており、いたたまれない感覚を抱えています。

今回いろいろな話を聞かせてもらい、カースト制度という身分差別と部落差別を考えると、制度的にも似ているし、人びとの心の中

にある根深い差別意識は同じなのだと思います。

アンベドカルに学ぶ

今、ダリットの人たちは立ち上がり活動しています。私は今まで部落解放の父「松本治一郎」と同じように、インドの独立の父「ガンジー」がカースト制度の問題も取り組んでいたと思込んでいたのですが、インド独立後の憲法の中に「すべての市民に公正と地位および機会の平等を保障する」ということを位置づけ、カースト制度の身分差別をなくすために活動を行ったダリット出身の「アンベドカル」という人がいたと教えられました。

アンベドカル思想や理念を学習する、アンベドカル学習コースというのがあり、130人を超える人が受講しており、今回その修了式に参加し連帯の挨拶をさせていただきました。修了生達は一人一人本当に輝いていました。

部落の青年は差別に負けない仲間作りと、理論武装をしようと取り組みを進めています。先達の想いを引き継ぎ伝えていくということがおろそかになっていると感じました。部落差別に立ち向かい水平社を立ち上げた先達の想いをしっかり学習し、部落解放運動に取り組んでいきたいと思えます。

ダリットの人びとに親近感を覚える

いろいろな話をしてもらいながら思っていたのは、次から次へと話が出て終わらない、私は英語をしゃべれないので、タミル語を英語に、そして英語を日本語に通訳してもらっていましたが、通訳が間に合わないほどの勢いでみんなが話をしてくれます。その姿を見て思いました。青年や、地区の人たちの話し方とそっくりです。自分たちの想いを一つでも伝えたいという気持ちの表れから、どうしても話が止まらなくなる。そんな姿に物凄く親近感を覚えました。

ダリットの代表が村の議員となり、いろいろな妨害を受けながらも、SREDなどの組織と連携をとりながら活動している人が何人もいて、地域での活動を組織が支え、事件が起きればみんなで解決をしていく。一人ひとりの力はなくても、みんなで協力すればどんなことでも出来るんだと再認識させられました。

インドに行って研修をしたということで終わりではなく、今後も関わりをもって取り組んでいければと思います。また、青年の活動の中にも何らかの取り組みを位置づけられたらと考えています。(ふかだひろあき)

ダリットの人びとに囲まれた故田中フォックス敦子さん

今回のツアーの目的には、2007年に亡くなったIMADRジュネーブ代表(当時)の田中フォックス敦子さんの写真をSREDのオフィスに飾ることが含まれていた。生前、敦子さんはダリットの子どもの将来に心を砕いていた。ダリットの若者たちの機会へのアクセスは平等に保障されるべきである。



SREDが取り組むアンベドカル学習コースはそうした可能性に灯りをともし、子どもたちに希望を与える。敦子さんのご家族の好意で、今年、コースを学ぶ若者たちの巣立ちを手伝うことができた。敦子さんの写真は、これまでダリットの解放のために身を投じた先達たちの写真が飾られている一室に、新しく仲間入りをした。

はじめての訪問 ダリットの人たちと出会って

清水 悠(部落解放同盟京都府連合会青年部)

2010年10月7日から12日の6日間、インドのタミールナドゥ州にあるSRED(農村開発教育協会)に受け入れをしていただき、私自身はじめてのインドと海外研修に赴きました。

今回IMADRの活動に参加した理由は自分自身の見聞を広げること、そしてインドという国に興味があり、行ってみたい国の一つだったから、という少し軽い気持ちでした。そんな気持ちで日本を出発しインド6日間の日程で、日頃の甘さと日本の恵まれた生活をしてきた自分に鞭を打たれました。

SREDの人たちが空港まで迎えに来られ、チェンナイにあるホテルに出発しました。この短い移動のときにも驚きと文化の違いにワクワクしながら向かいました。道路の簡易な舗装、地べたに普通に寝ている人たち、道路わきの山になったゴミ、信号の少なさ、常にどこかで鳴っている車のクラクション、各国独特の臭い(ゴミ・排気ガス等の臭い)etc、すべてが日本では感じることのできない文化の違いに、「日本に早く帰りたい」と一日目早々ホームシックにかかりそうな自分がいました。

TNWF(タミールナドゥ女性フォーラム)とTNDWM(タミールナドゥ・ダリット女性運動)の合同オフィス行き、ダリットについての話を聞きました。私はダリットに関わることはまったくとっていいほど無知でした。知っているのも日本と同じ身分制度があり、ダリットの人たちが差別を受けているということだけでした。

ダリット差別は、部落差別で水平社宣言ができるもっと前、部落差別が根強く残っていた時代のような差別が現在進行形で残っていました。ダリットの人たちが低賃金で労働させられ、殺人や強姦の被害者にされることは当たり前、国や警察は見て見ぬふり。ましてや、他カーストの男たちが、アンタッチャブル(不可触)と呼んで差別をしているにもかかわらず、ダリットの女性を強姦することの理不尽な矛盾。宗教についてあまり多くのことは知らないが、宗教のあり方について疑問に思いました。私の中の宗教概念は、人を成長させ、幸せになるためにあるものだと思っています。

チェンナイ市内では、100世帯ほどが住んでいる都市スラムを訪問しました。この都市スラムには地方の農村から流れてきたダリットの人たちが生活をしていました。

このスラムでは整備がほとんどされておら

ず、横には川が流れており、スラムの入り口に井戸が一つあるだけでした。流れる川は生活排水や産業排水で汚染され、真黒な水が流れており、生活環境や衛生面ではたくさん問題を抱えている場所でした。

そこにはたくさん子どもたちも生活しており、私たちが訪問した時には物珍しそうな顔で寄って来ては満面の笑みをたくさん見せてくれました。ダリットという身分で差別されることもあるかも知れないが、子どもたちの純粋できれいな笑顔を見て感動を覚えました。

そしてチェンナイから移動しカンチプーラムというたくさんのお寺がある街に行き、SREDのオフィスやダリットの村を回りました。

SREDでは、「セックスワーカー」「ダリット女性労働者」などの取り組みについて現地で働いている方に現状と改善されつつある点などさまざまな話を聞き、その中で興味を持ったのが、結婚差別についてでした。

ダリットの人たちにかかわらず、カースト制度の同位としか結婚できません。つまり、ダリットはダリット同士、僧は僧同士が原則的に決められているようです。

ですが、人間同士なので壁を越えた恋愛があり、異なるカースト同士の結婚もあるようです。ここでもう一つダウリ(持参金)という制度があり、嫁ぐ相手に持参金をもって行かないといけない制度があります。下位カーストが上位カーストと結婚するとき、差別の壁を越えても、貧しい生活を強いられている下位カーストの人たちには持参金を払えないということもあるそうです。たくさん柵を設けられた結婚には大変驚き自由な恋愛ができないことに悲しくなりました。

私が今回の研修で一番心に残っているのは、町の中心から隔離されて生活をしているダリットの村の生活で、国の政策もほとんど受けられず、貧しい生活をしている人たちが一所懸命生きているということでした。その中でも、子どもたちの笑顔、村の中で共同して助け合って生活する大人たち、生きているということを目にしてみても感じました。

いつかまた、ダリットの人たちやSREDでお世話になった人たちに会いたいと思います。今回たくさんの人たちに出会い、いろいろな経験をし、これからの部落差別やたくさん差別をなくすために何か力になれるよう努力していきたいと思います。(しみずひさし)



元気なスラムの子どもたち

再度の訪問・新たな発見 —ダリット子どもデイケアセンターを訪ねて

柄川 忠一(大阪同和・人権問題企業連絡会会員)

インド(タミルナドゥ州)チェンナイに3年半振りの再訪
日本を出発してから着陸するまで機内で、SREDの皆さんは元気になっているだろうか？自分のことを少しは覚えてくれているだろうか？ムトゥール村のダリットデイケアセンターはどうなっているだろうか？などと思いながら2人の顔を見て私の心は一気にスタディツアーモードに突入しました。

今回もSREDの事務所やダリットの村を3村訪問し、さまざまな解放運動の取り組みやダリット差別の実態について学ぶとともに、アナンダコラムでは町の中心部の街頭で行われたDr.アンベドカル学習コースの修了式に参加するなど、大変充実したプログラムでありました。

ムトゥール村のダリット子どもデイケアセンターへの再訪
スタディツアーの2日目午後、いよいよ私が今回スタディツアーの参加目的の一つにしていました、ムトゥール村の訪問です。ムトゥール村は、寺院で有名なカンチープラムから自動車ですぐの内陸部で、幹線道路から細い路地を経て村へ向かっていきます。

あの角を過ぎるとデイケアセンターが見えてくるのではないだろうか、記憶を辿りつつ周囲を観察しているうちに、ムトゥール村に到着しました。

村の入り口では大勢の村人が私たち一行を出迎えていただき、歓迎の儀式として大きなお皿に入れた赤茶色の液体を指で来訪者一人ひとりの額につけてくれました。

その後、残った赤茶色の液体を、道を横切るように細く流しそれを跨ぐようにして村へ入ります。

先頭は村の若者10人ほどでドラムを打ち鳴らし、にぎやかに村じゅうを練り歩いて案内していただきました。わざわざ家から出て、私たち一行にあいさつをしてくれる人、通りで待っていて握手してくれる人など大歓迎を受けました。

村の中を一巡した後、村の入り口からほんの50メートル位手前にある、ダリット子どもデイケアセンターへ向かいました。そこでは、村の長老が私たち一行を待ちかねた様子で椅子に座っていました。デイケアセンターの前には、私たちのための椅子や、村人のためのシートが敷かれてあり何やらセレモニーが始まりそうな雰囲気でした。

私たち5人は正面の椅子を勧められ着席、村の子どもや青年から高齢者まで50人ほどが前のシートに座りこちらを見てニコニコしています。三年半前に訪問したときには幼かった子どもが成長して中ほどの席に座って、こちらを見ているように思いました。

司会をされていた方が、私たち一行のことを紹介していただいた後、村の長老があいさつをされました。

長老はエネルギーが豊富な口調で、村人にアンベドカルの教えとダリット解放の取り組みについて熱く語っているようでした。村人も真剣なまなざしと敬愛の気持ちをもって聴き入っています。

私も自己紹介を兼ねてあいさつをさせていただくことになりました。

皆さんと再会できてうれしく思っていること、3年半前の開所式に参加できて感激したこと、その後の台風でデイケアセンターの屋根が吹き飛ばされたと聞き心配していたこと、などについて話をさせていただきました。デイケアセンターの屋根は、開設時には草葺でしたが、台風の被害を受けた後、改修を行いレンガ作りで、しっかりとしたものになっており、室内の手入れも行き届いていました。

また、長老は、「村の子どもたちが毎日この施設を利用して勉強やトレーニングをしている。支援にはとても感謝している」と話しておられました。私は、再訪できて良かったと心から思いました。IMADRがすすめる、当事者が自らの力で立ち上がるための支援ということの大切さをあらためて感じたところです。

旅を終えて

まとまりのない文章になってしまいましたが、今回のスタディツアーで得られた、自分自身の新たな発見と感想を次のようにまとめました。

- ▶人権を尊重する取り組みは時代とともにさまざまな形態で継続されるべきものであること、
- ▶それが人びとの平和と安全につながっていること、
- ▶IMADRが実施している草の根の国際連帯活動から多くの学びがあること
- ▶それは、人と人のつながりや、(被差別)当事者の意見を素直に聴くということがとても大切であるということ
- ▶命には限りがあり、そして生と死は常に隣り合わせであること
- ▶理解しあえる仲間がいると力強く生きていくことができること

など、その他にも多くの感動をいただきました。また、今回に参加したメンバーと出会えたこと、意見交換ができたことなども、私にとっての大きな収穫です。

スタディツアーから帰国して、私はまた日常の業務や生活の中にいます。私は、私のできることを自問自答しつつ、人権尊重の取り組みをすすめていきたいと思えます。このような機会を与えていただいたこと、そしてスタディツアーの企画や運営、受け入れていただいた皆さん、そして参加されたメンバーに心からお礼を申し上げます。

(えがわ ただかず)



デイケアセンターの前で



来客を迎える村の人たち

日本社会における部落問題と インド社会におけるダリット問題の交差

内田 龍史(部落解放・人権研究所研究員)

スタディーツアーへの期待

日本は、世界的に見れば、アジアの最東端に位置する国であり、歴史的に見れば、南アジア・東アジアの文化の影響を色濃く受けてきた。日本の部落問題も南アジアを起源に持つ仏教やヒンドゥー教などの宗教的な影響を少なからず受けている。では、日本の部落問題は国際的にはどのように理解されるべきなのか。人種問題なのか民族(エスニック)問題なのか。差別・不平等などいずれも現象的には類似しているが、どのような層化概念がしっくりくるのかと言えば、やはりカーストであろう。

では、その本場とも言うべきカーストを基盤としたインドの社会とはいったいいかなるものか。こうした問いについては、いくら文献にあたったり、頭の中で考えていても、実際に足を運んで体感するのが一番。こうした関心を抱きながら、初めてのインドを体験することとなった。

カースト・システムと「階級」——不平等問題

インド社会についてのレクチャーで学んだことは、インドは Caste based Society だということだ。よく知られた4つのヴァルナ(ブラーミン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラ)とその外に置かれたアンタッチャブル(ダリット)の人びと。こうしたカーストは単に身分が異なるというだけではなく、現代における不平等問題と直結している。ブラーミンは大地主であり、グローバル企業に土地を提供してますます栄えている。ダリットの人びとは土地を持たず、小作人として働かざるを得ない状況がある。単に古くからのカースト制度と身分差別があるというわけではなく、そこには資本主義的発展のもと、持つものと持たざるものへの分化、すなわち「階級」構造が歴然としてあるのだ。

日本の部落問題においても、特に高度経済成長以前、「階級」と搾取の形態がはっきりしていた時代には、地主制や資本主義的な搾取のシステムを問題にしてきた。高度経済成長を遅れて経験している現代インドは、かつての日本の状況とも重なる。

結婚差別問題——社会関係

SRED では、特に結婚差別の問題について

ダリットの活動家からインドの結婚差別問題についてレクチャーを受け、私も日本の部落の結婚差別問題を100年ほどの歴史をふりかえりながら、事例を踏まえてお伝えした。親が結婚に反対して子どもを監禁状態にするなど、日本の酷い事例に対しては、「そうだそうだ、やっぱりそうか」という反応。インドのダリットの結婚差別の事例も、聞けば聞くほど日本の部落問題と似たものが多いのである。

ただし、こちらのカースト間の結婚は殺人にまで及ぶ。他のカーストと結婚することは名誉を汚すことになるので、その回復のために当事者を殺す(名誉殺人)ことがある。そして、社会意識としては異なるカーストと結婚しないのがあたりまえという感覚がある。日本では少なくともタテマエ上は差別しないのがあたりまえになっており、そのあたりの社会意識は大きく異なる。こうした社会意識が、経済成長を遂げ、個人化が進展する中で今後どのように変貌を遂げるのか、注意深く見守る必要があるだろう。

最後に差別をなくしたいという思いは共通だという意見をいただき、世界的に連帯していくことの重要さと心強さを感じる意見交換だった。

研究の交差——諸問題克服の試み

ほかにも、部落問題との関係で対比をしてみたい課題は多くあるが、インド社会から見ると、特にカーストライク・マイノリティ問題である日本の部落問題に対し、資本主義的な経済発展をいち早く遂げ、同和対策事業という手法でその解決を図ろうとした日本社会の試みは、非常に重要な示唆を与えるのではないと思われる。カースト・システムが資本主義的な社会の発展と政策的な介入に伴ってどのように再編成されていくのか、日本とインドを比較研究するにおいて忘れてはならない視点である。

(うちだりゅうし)



大都市チェンナイ

ネパールにおけるダリット差別の現状と FEDO訪問報告

友永 健三(部落解放・人権研究所理事)

今年の3月19日から27日まで、JICA(国際協力機構)の要請で、ネパールにおけるジェンダー主流化とダリット等の社会統合をめざしたプロジェクトが企画したセミナーと現地訪問に参加した。また、IMADRのメンバーであるFEDO(フェミニスト・ダリット協会)の事務所を訪問した。その様子を参考までに報告したい。なお、以下の報告は、あくまでも個人的な感想をまとめたものであることをお断りする。

〈セミナーで部落問題を報告〉

3月22日(月)カトマンドゥウのホテルエレレストで「ジェンダー主流化と社会的包摂政策セミナー：ネパール、日本その他の国における経験の交換」をテーマにしたセミナーが開催された。参加者は、政府関係者やNGO関係者100名程度であった。筆者から「日本の部落問題と社会的包摂」をテーマにパワーポイントを使って報告をおこなった。報告のポイントは、①部落問題の簡単な説明、②戦後の部落問題解決に向けた取り組みの概要、③部落解放運動の果たした役割、④自治体や国が果たした役割、⑤成果と課題である。時間をオーバーするのではないかと心配したが、与えられた50分(通訳含む)以内に終わることができた。報告が終わったときに大きな拍手があった。

私への質問は、①部落民は、外国からきたのか？②部落がおかれている状況を改善するために最も重要なことはなにであったのか？③部落の女性が置かれている実態は？の3点であった。①については「同一民族」、「同一人種」の中の過去の身分に起因する差別である、②については、部落内のリーダーの養成、青年と女性の立ち上がりである、③については、部落の中でも女性が置かれている実態はより困難な実態に置かれていること、部落の中でもDVがあるのでそれとの取り組みが必要であること、審議会等へ女性の代表を入れることが重要であることを回答した。

〈ペタリア村での交流〉

3月23日、10時40分にカトマンドゥウからプロペラ機で50分ほど南東に飛んで、11時半頃ピラトナガル空港に到着。ここから四輪駆動車で1時間ほど走り、12時20分に、ダリットの人びと先住民族が暮らすペタリア村に到着。

会場の入り口に歓迎の掲示があり、大勢の人びとが手に手に花束を持って歓迎してくれる。会場は、学校の教室を2つほど合わせたぐらいの大きさの平屋建ての子どもセンター

である。天井に備え付けられた2台の扇風機が回っている。

JICAの一行は、壇上に置かれていた椅子に座って会議が始まる。進行と通訳は、モラン郡での今回のプロジェクトを専従として担当する方である。JICAから参加した一行が自己紹介をし、地元の参加者全員の自己紹介がある。子どもセンターということもあって、子ども会のメンバーの参加が多い。

その後、ペタリア村の代表者から地域の概要の説明があり、質疑応答にうつる。その中で、この地域にはユニセフの支援があって子どもセンターができてきていること、また子ども会が組織されていることが分かる。女性がおかれている問題としては、やはり経済的に苦しいので、女性の仕事が欲しいとのことであった。ダリットについては、仕事が不安定で生活が貧しく、なかなか集会にも参加できない状況にあること、住環境が劣悪でトイレもないとのこと、ただ、ダリット出身の教員が1名いるとのことであった。なお、参加してくれた地元側の進行役をしてくれた男性はダリット出身とのことであった。

今回のプロジェクトの受け皿になる、この地域の委員会の構成を聞くと、女性5、ダリット3、後進階級2、ジャナジャッティ(先住民族)4、政党代表7ということで、政党代表の比重が多く、女性の比重が少ないことが分かった。これに対して参加者の女性からもこのような委員会が作られていることを知らなかったとの発言があり、JICAの代表からも女性の比重を少なくとも33%にしてみたいとの要請がある。これに対してペタリア村の代表者から今後そのようなよう努力したいとの回答がある。

1時間半ほど交流をして、会場を出たところにある店で焼きそばをご馳走になり、ペタリア村をあとにした。

〈ポカリア村での交流〉

3月23日は、ピラトナガルのホテルに泊まり、翌朝8時にホテルを出発。四輪駆動車で1時間あまり走り、9時10分にポカリア村に到着。ここでも地域の人びとが手に手に花を持って出迎えてくれる。

村役場で、自己紹介をする。地元の参加者の中に、マデシの政党、マオイスト、統一共産党などの政党関係者が多い。自己紹介だけにとどめ、早速地域の視察へ向かう。

村役場から少し行くと大きな池がある。そこから少し歩くと、最初にジャナジャッティの人びとが暮らす家が10軒ほどあり、次いでダリットの人びとが暮らす家が40軒ほど



ジェンダー主流化と社会的包摂政策セミナー(3月22日)



ペタリア村での交流・実態を訴える女性(3月23日)

並んでいる。ダリットのリーダーに、村の生活について話を聞く。仕事は小作か工場労働者で、収入が少なく生活が苦しいとのこと。40世帯ぐらいの地域に共同で使うポンプがわずか3台である。あと5台は欲しいとのこと。

道端で竹細工をしている人がいて写真を撮らせてもらう。やがて、ダリットのリーダーの家の前に到着する。リーダーの家は、駄菓子屋さんをしている。いつとはなしに10人ぐらいの女性と子どもが集まる。子どもの教育のことについて尋ねると、近くに小学校がないため中学校に小学生も通っているとのことである。学校に通っていない子どももいるとのことである。近くに小学校を建てる計画が固まっているとのことであった。11年まで学んだ青年がいて、地域の子どもの勉強を大きな木の下で見ているとのことであった。部落解放運動の初期の姿がある思いをした。その青年に、がんばって欲しいとの言葉をかけて、次の区域(ワードと呼ばれている。日本での「小字」にあたる)に行くと、そこは後進階級が住む地域だとのこと。

道路を左に曲がり少し行くと、別のダリットの集落があり、リーダーだという19歳の青年が挨拶をしてくれる。この青年は、11年を卒業しているが、そのダリットの地域では初めてだとのことである。もう少し行くと、竹とワラでつくった30人ぐらい入れる簡易な集会所に、女性が20人ほど集まって話を聞いている。近づいて行って聞いてみると、小口融資の勉強会をしているとのことであった。

おおよその状況がつかめたので、村役場に戻る。途中、病気を治すための「お呪い」をしてもらっている家に立ち寄る。この家は、少しお金を持っていると見えて屋根にパラソルアンテナが付いている。ちなみに、この村全体に電気は通じている。あとで気付いたことであるが、この地域の入り口に少ししっかりとした平屋の建物で診療所がある。この日は休みだとのことである。また、村役場の斜め向には、小さなヒンドゥー教のお寺もある。

村役場に戻り、地元のお菓子をご馳走になり、JICAの代表と私から、今回のプロジェクトを活用してこの地域の女性と社会的に排除された人びとの立ち上がりを訴えた。

〈セミナーと視察で感じたこと〉

3月24日に総括会議があったが、そこで筆者が発言したことは次のとおりである。

- 1, セミナーでの筆者の報告に対する感想を聞いて欲しい。「良かった」とのことであるが、なにが参考になったのか知りたい。
- 2, テタリアア村とポカリアア村を視察して、1950年代の部落解放運動が盛り上がり同和行政が開始される前の大阪の部落の実態に告示している。(住環境や教育の実態、リーダーや若い人女性の存在など)

- 3, ネパール人で地元と日常的にコンタクトをとれる人の役割が決定的に重要
- 4, 村で取り組みがおかれている実態を変えられることを訴えていく必要がある。今回は、日本の全国レベルの報告をしたが、次回機会があれば、具体的な一つの部落が立ち上がり、おかれている実態を変えていったことの紹介をすることも重要だと思う。
- 5, それぞれの拠点の村毎に、獲得目標を定めていくことが必要

〈FEDO事務所を訪問〉

3月25日、カトマンドウのホテルにFEDO代表のドゥルガ・ソブさんが迎えに来てくれている。ドゥルガさんの車で事務所まで来て欲しいとのことで、通訳のチャンドラさんとともに伺う。

FEDOの事務所は、カトマンドウ市内の中心部にあり、自己紹介の後、会議室で7名のスタッフとともに懇談する。中には、大阪や奈良で部落解放同盟の女性と交流した経験を持つスタッフもおられる。

私からは、部落問題に関する資料渡し、ジュネーブでおこなった第5回執行委員会の報告をする。また、JICAのジェンダー主流化と社会的包摂プロジェクトの紹介をし、JICAネパール事務所と連携をとってみたいかどうかと提案する。

ドゥルガさんからは、ネパールにおけるダリットに対する差別の現状として、ある地方のダリットの人びとが「薬草」を取りに行っていたところ、軍人から発砲され3名が亡くなったという事件が3月はじめに起こっていて、抗議行動をしていることが紹介される。

また、FEDOは、1994年に創立され、カトマンドウに本部があるだけでなく、半分ほどの郡に支部組織を持っていること。女性の自立支援に取り組んでいて、カトマンドウで美容師の資格を取って美容院を開いたり化粧品を販売することに成功している。地方では、野菜の栽培などにも成功していることが紹介された。

財源としては、ネパール政府からは補助はなく、これまでは、アメリカの財団の支援をもらっていたが、近年EUからの支援をもらっているとのことであった。

役員は13人いて、5人が地方から、2人は、最も困難な状況に置かれている人びとから、6人は選挙で選ばれている。任期は4年である。総会は、毎年7月に開催しているとのことである。

記念撮影をして、来年5月、IMADRの理事会と総会が東京であるので、是非ドゥルガさんも参加してもらいたいとの依頼をして別れを告げた。(ともなが けんそう)

ダリット・部落そしてジェンダー 変化のために立ちあがるダリット女性たち

IMADRのパートナー団体であるタミールナドゥ女性フォーラムはマイノリティ女性に大きな影響を及ぼしているグローバル化の問題にとりくんでいる。急速に開発が進むタミールナドゥ州において、ダリット、イルラ、モスLEMなどマイノリティコミュニティの女性たちはグローバル化がもたらすさまざまな問題に直面してきた。州政府が掲げている開発目標と成果を誇る数値は、彼女たちのおかれている実態とはずいぶんかけ離れているようだ。2010年8月末に開かれた女性法廷の報告をここに要約して紹介する。

女性法廷 貧困・社会的排除撲滅の政府責任を問う

報告：タミールナドゥ女性フォーラム／ワダ・ダ・トド・アビヤン
抄訳：IMADR-JC

インド政府が国連ミレニウム開発目標(MDG)に取り組んで10年が経つ。政府のウェブサイトには順調な取り組みを示す数字やデータが公表されているが、大多数の市民組織や女性団体はこれまでの成果には多くの欠点があると指摘している。

また、本来数字やデータの変化は“生活の質”の向上に反映されるべきはずなのに、政府の取り組みのすべては量的目標に向けられているという批判がある。

MDGの成果は生活の質の向上にどのように結びついているのか？実態を把握するために、ワダ・ナ・トド・アビヤンとタミールナドゥ女性フォーラムは2010年8月29日と30日にチェンナイで女性法廷を開催した。タミールナドゥ州の17地区から200人以上の村議会議員が集まった。参加した女性たちは、ダリット、少数部族そしてムスリムのマイノリティコミュニティからの代表であった。

5つのテーマにそって討論が行われ、女性たちは証言を行なった。報告者として招かれた活動家や専門家は、女性の視点から問題提起を行なった。

テーマ1:社会的格差

問題提起:ブルナド・ファティマ
(タミールナドゥ女性フォーラム)

私たちはみな、名前ではなく、どのカーストに属しているのかによって識別されている。私たちは職業と生まれを理由に切り離されてきた。今では、留保制度と特別措置があるゆえにカーストが維持されている。配給店舗においてさえ、貧しい人びとは長時間列を作り、ようやく順番がまわってきたら、「今日は終わり。また明日」と言われる。イルラ

部族のある老女は砂の中から米粒を拾って飯を炊いていた。私たちは本来のとり分さえ奪われており、権利のために闘い続けなくてはならない。

証言(女性たちの声):

- *女性、とくにムスリム女性は運動にかかわることを禁じられている。この掟を破るとき、女性たちは二重の挑戦に立ち向かわなくてはならない。
- *たとえ女性が村議会で権限のある地位についても、結局は操り人形として扱われ、権限を行使できない。
- *村議会でダリット女性議員はコミュニティの外からだけではなく家族からも脅しを受ける。
- *少数部族はアウトカーストとみなされ、人並みの生活をしようという試みは握りつぶされてしまう。ウドゥマライペットでは少数部族1,600世帯が村議会選挙の投票権をもっていない。
- *少数部族やダリットは権利証がないまま土地に住んでいる。
- *マイノリティコミュニティに属する人びと、とくにダリットは、墓を建てるためにさえ闘わなくてはならない。共同墓地で墓を確保することを拒否されてきたダリットにとって、墓地は論争の種となってきた。このため、ダリットと他カーストの墓地を分けることになった。
- *不可触性は州の一部の場所で今日も実践されている。公立病院で、ダリット女性患者に医師は触れようとしないため、患者はダリットの医師が来るまで待たなくてはならない。

*経済の向上はダリットにも少数部族にも何らよい生活をもたらしてはいない。人びとは今も支配カーストに苦しめられ虐げられている。

テーマ2:女性の政治的参加

問題提起:クリシュナヴェニ(NGO代表)

ダリット女性の政治世界への進出の背後にある第一の理由は留保制度であるが、先の2006年の総選挙では留保に頼らずに当選したダリット女性議員が多くいた。ますます多くのダリット女性が政界入りを遂げているが、その一方で彼女たちは夫や他カーストの男性の操り人形になっているという批判がある。

女性は選挙戦で数えきれないほどの妨害にあう。政党は女性党員が州選挙に立つことを快く思わない。ある政党では立候補を許されなかった女性党員が無党派で闘った。選挙に勝ったら、政党は彼女を呼び戻した。女性の間では贈賄は比較的少ないため、賄賂で私腹を肥やしたい役人は女性より男性候補者を支持する。ダリットの女性議長が特別議会を招集したら、同僚議員はボイコットをして出てこない。女性には闘う力がある、だからこれらの妨害を突破しよう。

証言:

- *選挙に出ること自体、女性にとっては挑戦だ。政党でさえ、女性党員が立候補をして選挙に勝つことを喜ばない。
- *選挙に勝っても女性は権限を保障されない。議員として任務を果たそうとしても、同僚議員から議会事務局に至るまで非協力であり、敬意をもって接しようとしめない。これら困難に反発する女性議員もいるが、その他は黙認をして、物事を前に進めるために操り人形となることに甘んじている。
- *政治の世界における女性、とりわけマイノリティコミュニティの女性が、中傷キャンペーンの標的にされるのは今に始まったことではない。濡れ衣や拉致事件は以前からあった。
- *留保制度によりマイノリティコミュニティから多数の女性たちが政治に参加するようになった。しかし、彼女たちが決定権を行使し、他カーストの傀儡とならないようにするためには、まだ多くのことをやらなくてはならない。

*村議会で女性議員が腐敗について究明したら、トラブルメーカーだと名指しされ、その後の会議について知らされない。

テーマ3:女性と経済的格差

問題提起:アナンディ博士(NGO代表)

多くの経済政策が女性に向けられているのに、なぜますます多くの女性が貧困に追いやられているのか?タミールナドゥは開発で2番目に成功している州であり、すべての措置は適切に人びとに届いていると言われている。統計数字によれば、識字率も高く米の配給プログラムもうまく行っている。だが、これら統計数字は現実世界や女性たちの苦闘を反映していない。工業部門のインフォーマルセクターは大きくなり、農業部門は退化した。ますます多くの未婚女性たちが適切な労働法の保護もないままインフォーマルセクターで働いている。政府の措置はこれら女性たちにどう影響しているのだろうか?

証言:

- *政府は貧困対策をいろいろ行っている。これら対策を利用するには、“BPL(貧困線以下)番号”が必要となる。だが、貧困層の多くがこの番号をもらえず、影響力のある裕福な人びとに与えられている。
- *穀物を耕していた土地は換金作物のために使われるようになった。長期的に見れば、女性たちから安定した収入源を奪うことになり、人びとから肥沃な土地を奪うことになる。
- *ダリットのために割り当てられた土地がダリットたちに届いていない。
- *女性は貸付の利用はできるが、貸付自体を管理することはできない。
- *NREGA(農村雇用保障法)に基づいて賃金が適正に支払われていないため、女性たちの苦労は増える。

テーマ4:質の高い普遍的教育へのアクセス

問題提起:シャンムガヴェラユダーム教授
(ロヨラ大学社会福祉学部)

タミールナドゥ州では1991/1992年の識字率が62.7%であった。現在それは77.5%に伸びている。男性で見れば74%から84%に上昇し、女性では54%から64%に上昇した。



女性法廷



熱心に聞き入る女性たち

しかし読み書きができる男性と女性との差異は埋まらないままである。地域差も大きく存在する。都市と農村では大きな開きがある。州の識字率を語るとき、このことを忘れてはならない。チェンナイだけでも小学校が80校閉鎖されたが、“他の学校との統合による”と記録されている。初等教育レベルで退学率が大幅に軽減されたという報告はあるが、名簿を見れば然るべき子どもたちの名前が全員載っているわけではない。数字を疑わざるをえない。

- * 教員はダリットの子どもたちの学習意欲をそぐようなことをする。
- * 移住者やナリクラワ（先住民族）の子どもたちは学校で勉強を続けることができない。
- * 都市部では生徒たちに通学バス定期券が支給されているが、農村には通学時間にあようなバスの運行サービスはほとんどない。バスは走っていないし、道路も未整備なため、子どもたちは長時間かけ徒歩や自転車で通学している。そのため親は子どもの通学に熱心ではない。
- * 学校の所在場所が子どもの不登校の大きな要素となっている。
- * カースト間の衝突はマイノリティコミュニティの子どもたちが適切な教育を受けることを妨害している。
- * 学校の監視がないため、教員たちは権限を濫用している。一部の学校では、教員は学校にこない。来たとしても、教室で私的なことを行ない、子どもたちを遊ばせている。
- * カーストは学校においても教員・生徒を分断している。
- * 質の高い教育は望めそうにもない。なぜなら、7年生になっても基礎的なタミール語も知らないし、英語のアルファベットも知らない生徒が多い。
- * インフラ欠如と教員不足では普遍的教育も絵にかいた餅だ。クラスは一つ、先生は一人という学校が多数ある。
- * 教員の無関心は子どもの教育を脅かしている。子どもが退学しても、なぜその子が学校をやめなくてはならなかったのか、学校に呼び戻すために何をすべきなのか、な

どの検討はされない。

- * 学校には教員が一人しかいないため、1学年から5学年まで生徒たちは同じ教室で勉強をする。公立学校の水準が低いため、経済的に裕福な家族は子どもを私立の学校に行かせる。ダリットや部族など貧しい家庭は他に選択肢がないため、子どもを公立に行かせるしかない。
- * マイノリティコミュニティに対する政府の留保制度や措置について認識のない人びとが多すぎる。

テーマ5: 包括的な保健サービス

問題提起: ゴマシ(保健士協会会員)

村の保健士である私は誰よりも現場をよく知っていると思う。村人は、保健所の水槽がつまっているためその水は汚染されていると言う。水槽の清掃費用として村の総予算1万ルピーから使えばよいだろう。村に重病人が出たら、その治療に予算を使えばよいだろう。日々いろいろな問題が起きる。わずか1万ルピーですべてを解決できるわけではない。それ以外にも器機の保守にもお金が必要だ。保健所は大抵支配カーストの居住区に立っている。保健所を封鎖しろという声があがれば、そこはちゃんと機能しているという報告書を書かせて封鎖を阻止している。

- * 連邦政府の保健行政計画を州政府は適切に公表していない。
- * 陣痛の始まった妊婦をひっぱいたり、性暴力にさらされた6歳の少女の母親を虐待したり、公立病院の医師と看護師の無神経さは極まりない。
- * 診察に訪れた人たちは保健所と公立病院の間をたらいまわしされ、精神的に疲れ果て、トラウマさえもつようになっている。
- * 村の保健所の看護師には年間1万ルピーの資金が割り当てられ、それで医療器具を買い、不具合を修理し、全般的なメンテナンスもしている。わずかな予算の結果、保健所は大変不健康な状態にある。
- * 上司に言われた余分な仕事をこなさなくてはならない村の保健士には、本来の仕事に打ち込む時間がほとんど残されない。
- * 村の病院ではびこる賄賂のため、治療は民間の病院よりコスト高になっている。